

はじめに——『大和物語』の再評価を求めて——

山 下 太 郎

書かれた作品としての『大和物語』の題号がもつともはやく現出する書物は、平安時代後期の『袋草紙』であらう。<sup>(1)</sup>『袋草紙』は、百五十〜百五十三段など、『大和物語』のいくつかの章段をとりあげて、歌に関わる伝承の事実を伝えるものとしている。

また、「伊勢物語 和歌二百五十首」の項につづけて「大和物語 和歌二百七十首」の項をたてる。示された『大和物語』の歌数は現行本の二百九十四首より少なく、『伊勢物語』ほどではないものの『大和物語』もまた、増補改訂などの流動の過程にあったことを窺わせる。

藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇（一九〇五年初刊）』は、『大和物語』に触れて『千五百番歌合』の顕昭の判詞で「源氏、世継、伊勢物語、大和物語とて歌謡の見るべき歌」<sup>(2)</sup>とされたことを紹介するが、高い評価をあたえることはない。「片々たる事実を輯めたるもの」「文学的価値甚だ多からず」「伊勢物語の体を学びて（中略）なお彼に及ばず」「伊勢は奇抜に、大和は平凡なり」「（全体を概括し

て論ずるは) 容易のことにあらず」などとするのである。<sup>(3)</sup>

事実を伝えること、歌に重点を置く「歌物語」であること、しかし、『伊勢物語』に劣ること、などは現在の一般的な認識も大差はないのではないか。『大和物語』とは何か、が必ずしも明確になっていないこともその一因であろう。果たして「歌物語」という括りで『伊勢物語』と同一次元で扱うことは適切なものか。再検討の時期に来ている。

『伊勢物語』の語りは和歌に収束していく「歌のための語り」である。対して、『大和物語』の語りは必ずしも決着を「歌」にゆだねない。「地の文」の語りによる叙述と描写に、『伊勢物語』に比してより多く注力する。「和歌」を散文の機能に包摂し、相対化しているのである。いいかえれば、「和歌」が「語りのための歌」になっている。『大和物語』は、「歌物語」から散文叙述によって形成された物語の方へ、『伊勢物語』とは別の一步を踏み出したものとなっている。

「歌物語」という括りで同一範疇にあるものとして扱うのであれば、和歌に収束していく散文叙述の凝縮度、あるいは、文学作品としての質の高さにおいて、『大和物語』は『伊勢物語』に及ばないかもしれない。しかし、こうした評価は一面的ではない。『伊勢物語』の質の高さはそれとして、『大和物語』には『伊勢物語』とは異なる作品の質の在り方、素晴らしさ、いわば『大和物語』としての達成があるのではないか。

『大和物語』は歌に依存しない散文のありようを模索し実現したのである。文学史散文史の射程を遠く延ばし、『源氏物語』の散文までも視野に入れるならば、『大和物語』における散文叙述の方法論的達成は是非とも再評価されなくてはならない。和歌に依存しない、散文としての叙述の力、例えば、「内話文」の多用によって描写の方法を腐心し模索する点、和歌と散文もしくは散文相互の言語遊戯的な関連など、その散文叙述の様相いわば散文叙述性を再吟味することで、『大和物語』という作品の持つ光芒および文学史的な車轍が明瞭になるのではないか。

『伊勢物語』と『大和物語』との間には大きな跳躍がある。本書は、それを実現した『大和物語』の達成を見極め、その再評価を希求する試みである。

#### 注

- (1) 藤岡忠美校注『新日本古典文学大系・袋草紙』(一九九五年十月岩波書店刊)。
- (2) 『千五百番歌合』の本文は、古典ライブラリーWeb版『国歌大観』による。
- (3) 藤岡作太郎・秋山虔他校注『国文学全史平安朝篇1(東洋文庫198)』(一九七一年十一月平凡社刊)。